愛知池自然観察会 NO. 82	2020.1.9(木) 晴・風吹く 最高13. 4 最低7. 5 参加者10人

北風が強く、水面が波立ち岸に打ち寄せていました。その割に寒さはさほどではありません。12月に網を張っていたジョロウグモが未だに健在です。生きものも調子が狂う今年の冬です。初参加の方2人を迎え、100年の森から桜並木まで歩きました。

ヤマシロオニグモ

梅雨明け頃から見るクモです。冬に初めて見ました。水資源機構の愛知用水総合管理所の門扉に糸で作った直10ミリくらいの袋(↓の先)の中でじっとしていました。頭部の先、下を向いている触肢の先が細いことからも分かりますが雌でした。

サルスベリの実

左が実の中にあった種です。中国原産。花弁が縮れています。8月頃から秋まで長く咲き続けます。百日紅ともいわれます。

ミサゴ

タカの仲間ですが魚鷹の異名があり、魚を好んで捕り、魚を胴体に平行にして運ぶのを見ることがあります。

クチナシの実

果実が赤く熟したら種が出てきそうですが、はぜたりすることはありません。別名はガーデニアとも。実が色づくのが普通ですが、クリーム色の実もありました。

ツヤアオカメムシとクサグモの卵のう

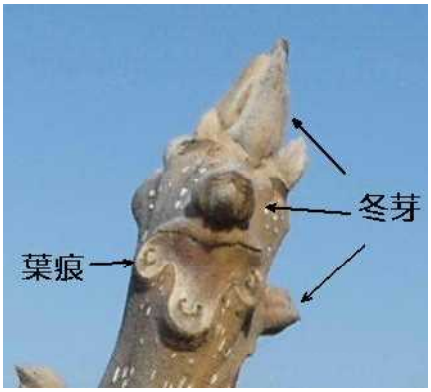
2 匹のツヤアオカメムシは居候でしょうか。クサグモの母親は暮らしているた巣の奥に、丈夫なシートで囲われた卵のうの中に卵をうみます。シートは周りから紐で引っ張られています。 どうやって作るのかな。

テイカカズラ種

テイカカズラは細長い実を付けて熟すと裂けて、左のように先端に白い毛を持つ種を風に乗せて分散させます。

冬芽（左：アラカシ、右：ムラサキシキブ）

寒さや乾燥から大切な冬芽を守るため、アラカシの冬芽は固い鱗でおおわれています（鱗芽（りんが））。それに対しムラサキシキブの冬芽はむき出しです（裸芽（らが））。



オニグルミの冬芽と葉痕

羊の顔に見える所は葉が落ちた痕です（葉痕（ようこん））。その上にあるのが冬芽で、芽鱗（がりん）をかぶっていたのですが直に落としてしまうそうです。

ニホンタンポポ

冬を越す草は、北風を避けるために、タンポポのように地面にへばりつくようにしています。この形がバラの花に似ているのでロゼットと呼ばれています。

ムネアカハラビロカマキリ卵嚢

在来種のハラビロは卵のうを枝にへばりつかせるように産みますが、外来種のムネアカの方は下の方（→）を浮き上がらせるのが特徴です。在来種が減っているように感じます。

スズキクサカゲロウ

落ち葉の上でじっとしていました。卵の産み方が独特で、丈夫な糸を伸ばした先に丸い卵を産み付けます。アリの攻撃を防ぐためではないかと考えられます。

植物 ヒメジョン、サザンカ、ニホンタンポポのロゼット、コマツヨイグサロゼットと花、コマツナギ実、ナンテン実、マメガキ実、ヘクソカズラ実、テイカカズラ種、サルスベリ種、カラスウリ実と種、ニセアカシア実と種、ソヨゴ実、ムラサキシキブ実、ヌルデ実、ノイバラ実、ヤマハゼ実、冬芽（スギ、メイヨシノ、ニセアカシア、ヤマモモ、アラカシ、シラカシ、コナラ、ムラサキシキブ、等）、どんぐり（アラカシ、シラカシ）、 昆虫 ヤママユ空繭、ツヤアオカメムシ、アブラゼミ羽化殻、ニイニイゼミ羽化殻、 クモ ヤマシロオニグモ、アシナガグモ、クサグモ卵のう、ジョロウグモ卵のう、スズキクサカゲロウ、 鳥・その他 ミサゴ、ハシボソガラス、ヒヨドリ、ツグミ、メジロ、コゲラ、カワウ、カルガモ、カンムリカイツブリ群、マガモ、ホシハジロ、オオバン、（虫こぶ）イスノキハタマフシ、イスノキエダチャイロオオタマフシ、（茸）ヒイロタケ、スミレウロコタケ、終了後：キカラスウリ実、コマツナギ実、コマツヨイグサのロゼット（花）

次回は２月１３日（木）、午前９時30分～12時、水資源機構P前集合、参加費100円